

書 評

水島 司(編)『激動のインド 第1巻 変動のゆくえ』

東京：日本経済評論社、2014年、309頁、4000円＋税、ISBN 978-4-8188-2283-2

岡橋秀典

本書は、『シリーズ 激動のインド』全5巻の第1巻にあたる。国名に「激動」を付したタイトルがふさわしい国はそう多くないと思われるが、現代のインドはその数少ない国の一つと言えよう。1990年代以降のインドは、それまでのイメージを払拭するような急激な変化をみせてきた。本書の冒頭もこうした激変への驚きを率直に吐露しているが、このシリーズはそのような変化を紹介するだけにとどまるものではない。「激動しているかに見える変化の底辺に、どのような質的な変化が埋め込まれているかを解明」することに力点が置かれている。

このシリーズは、インド変貌の全体像を明らかにするために四つの手法をとっている。第一に、現在の変化を長期変動の中に位置づけ、マクロ（長期・広域）とミクロ（短期・事例）の両視点で交差させて考察すること、第二に、地域分析の手法として定着したGIS（地理情報システム）を全面的に採用すること、第三に、この手法により種々のデータを空間情報へと変換し空間の特徴を把握すること、第四に、個々のデータの質的意味を具体的な事例と関連させて検討すること、である。特に、長期変動の視座とGISによる分析は、本シリーズの斬新さを象徴している。

本シリーズの他の4巻は、第2巻『環境と開発』、第3巻『経済成長のダイナミズム』、第4巻『農業と農村』、第5巻『暮らしの変化と社会変動』となっている。既存の学問分野による区分ではなく、変化を捉える上で重要と考えられる事象を中心に構成している点が特徴と言えよう。その中で、第1巻の本書は、全体の見取り図を提示し、第2巻以降への導入となることが期待されている。

さてここで取り上げる第1巻は3部構成である。第1部「長期社会変動」では、本書の（さらに本シリーズ全体にも及ぶ）基本的な分析視角を提示し、これに対し、第2部「激動を生きる」と第3部「成長と軛」は、具体的な変貌の諸相を報告するという構成になっている。

第1部では、激動するインドを捉えるための分析視角として、「長期社

会变動」と称される歴史的視点と都市農村関係を中心に、インド社会を捉える視点を示している。

第1章では、現在のインドの変化が、長期にわたる社会内部の変化の蓄積の中で生じているとの見方に立って、18世紀から経済開放に至る1990年代までの変化を時代順に考察する。まず18世紀のインドは、綿業を中心に海外市場ともつながる高度な商品経済の展開を実現し、同時に過渡的な状況としてサービス交換関係にもとづく現物経済も併存していたとする。これが19世紀前半になると、植民地化により大きく再編される。内的には、新たな土地制度の導入と土地の排他的所有権の確立を基盤とした社会関係の再編により、在地社会の再生産システムが解体され、個別的な商品交換関係へと移行したこと、また農民化の進行が耕地開発と農業生産の拡大をもたらしたこと、さらに外的には、18世紀のグローバルエコノミーにおける中心的な地位から、イギリスを中心とする世界市場へ組み込まれたことを述べている。19世紀後半にはイギリスによる植民地開発が進展し、インド帝国の下での経済活動が活発化する。グローバルエコノミーへの一層の統合、集約的農業の進展、工業化、一部都市の発展、海外移民などが指摘される。続く20世紀前半では、第一次大戦を契機に工業化がさらに展開したが、未だ手工業の方が工場制工業を凌駕していたこと、民族資本の発展がみられたことに注目する。独立後については、計画経済の展開とその限界、そして開放体制への移行が簡潔に述べられている。

このようにきわめて密度の高い内容となっているが、現代を規制する歴史的要素が必ずしも明示的に述べられているわけではない。重視していると考えられる歴史的要素は次の3点と推測する。

第一には、農村の社会関係のあり方の変化である。サービス交換を基礎とした在地社会の再生産システムから個別的な商品交換関係に移行して、個々の地片での地主・小作関係や地主・農業労働者の関係が卓越するようになった。

第二には、人口動向の地域別特徴と地域差があげられる。それはインド内部での発展のダイナミクスを生み、現在までの経済発展、人口動向の地域差をもたらしている。19世紀後半、南インドと東インドが大きく伸び、西インドや北インドの伸びははるかに小さい。それは、それまでの開発の進捗を反映している。

第三には、19世紀後半に、市場と生産における薄い上部と厚い下部からなる二重構造が創出されたことである。イギリス製品の市場を提供した上部に対し、下位市場の拡大は製造業に一定の発展の機会を与えた。この構造は、現在のインドの産業発展の原型をなしている。

第2章は、現在のインド社会の変化を、都市と農村の関係を切り口に広範な問題と関連づけて捉えている。冒頭、都市人口の増加に着目し、人口移動、情報の流動、消費財の普及などの面から都市と農村のつながりの増大を確認する。都市と農村の溝が埋められ、両者の融合の度合いが深まっているとするが、これを空間的に、都市と農村の中間地域に注目して深めている点がユニークである。その理由は、この地域の開発の中には、空間的な変化に加え、人々の選択と思惑、解決すべき問題が潜んでいるからであるとする。農村住民の行動の論理に依拠して、非農業雇用の確保、そのための教育の重要性、都市近郊への移住、教育施設の立地、工場進出と雇用の拡大、それによる雇用関係の変質、雇用の階層分化と労働移動の分断性、カーストごとの教育への対応などが一つのストーリーとして語られる。そのうえで、このような個別対応の前にあるマクロな構造として、労働市場と生産構造に焦点を当てる。インドの重要産業の特徴として労働集約的な性格を指摘し、学歴も高くなく技術水準も低い流動的な労働者が多数を占める労働市場、それは消費市場の需要が階層化され分立した構造に反映しているとみる。そのうえで、インドの消費市場構造、需要構造に安住し、高度な経済成長を遂げてきたインドが、今後も成長を続けることができるのかという本質的な問いを発する。重要度を増しつつある海外市場とそこにおける競争の激化にも留意して、低廉で技術水準の必ずしも高くない労働力を武器に、他の諸国が容易に追従できる商品がインドの成長を支えられるだろうかとの問いは重い。本章の考察は、農民の世帯戦略をふまえ論じている点が説得的であり、既存の理論に頼らず、著者の観察や経験、データにもとづいて組み立てられている点に特徴がある。やや体系性に欠けわかりにくい面がないわけではないが、オリジナルな論が展開されている。

第2部は、変化するインド社会の諸相を、人々の生を取り巻く諸側面、具体的には教育、ジェンダー、自殺、健康問題から描く。

第3章が取り扱う教育は、第1部で言及されたようにインド社会の変化を理解する際に重要な意味をもつ。ここでは歴史的にふりかえり、時

期ごとの特徴をまとめる形で考察を進め、教育の分断性と標準化の欠如を、今日に至るインド教育システムの特徴として導き出す。経済自由化後は一層の複雑化がもたらされたが、構造化された格差や分断は未だ克服できていないとしている。バランスのとれた記述がなされ、完成度の高い論考となっている。また適宜挿入された日本との比較も有効で、読者の理解を助けている。

第4章は、女性の政治参加について、インド全体の動きをふまえた上で、ケーララ州を事例に分権化と女性留保枠実施について検討する。それらが村落女性にもたらした変化として、公的領域における女性の行動と活動の範囲の拡大、ジェンダー予算による女性の労働参加拡大を導き出し、今後の地域ガバナンスの深化と成熟を展望している。その問題点として、ジェンダー規範の再構築が未だ不十分な点にも言及している。ローカルレベルの研究により変化過程の丁寧な考察がなされているが、対象地域の社会経済変化、およびそれと政治過程の関係が論じられておらず全体像がみえにくいのが難点である。

第5章は、経済成長をとげるインド社会の陰の部分として、農民の自殺をとりあげる。既にメディアで注目されたテーマであるが、ここでは州別の自殺率統計と西ベンガル州の自殺多発村の実態から議論を深めようとしている。州別には南部諸州と西ベンガル州で自殺率が高いこと、西ベンガル州の若者の自殺では、その背景に雇用不足などの若者を取り巻く閉塞状況があるとしている。自営農民の苦境から説明する従來說に対し、若者の閉塞感に光を当てた点は評価されるが、自殺の問題はもう少し広範な検討を要するように思われる。自殺多発州における都市・農村間の違い、ビハールやウッタルプラデーシュなどの貧困州での発生率の低さなどの検討は、この議論を深めるのに役立つだろう。

第6章は、生活水準に関わるが市場で入手不可能なものとして健康を取り上げている。健康状態、疾病、男児選別に焦点を当て、諸外国との比較も含む適切なデータ提示を行い、明快な議論が展開されている。生死に関わる健康では、平均寿命や死亡率の改善や平均身長を増加を指摘するが、女性、農村、被差別カーストにおける相対的劣位を問題視する。先進国型に急速に移行しつつある疾病パターンでは、その背景に胎児期・乳幼児期の栄養不良を推定し、また男児選好を確認したうえでそれが徐々に弱まっているとする点は、健康問題の議論を深める貴重な指

摘である。

第3部は、インドの発展を支える経済に光を当てる。アパレルと製薬産業、乳業からみた農村経済、インフラとしての電力供給について考察する。

第7章は、小規模事業所が卓越する産業として、アパレル産業を取り上げる。小規模事業所の保護を長く行ってきたインドにおいては、経済自由化後、この種の産業にどのような変化を生じているかはきわめて重要な検討課題である。

ここではそれに応えるためにクラスターを単位とした分析を行い、2000年代の同産業の安定的成長を確認するとともに、その持続可能な要因として、中間所得層による国内の購買力上昇、国内流通システムの特殊性、アパレル製品の差別化による多様性をあげる。そこから、インド国内の特殊な市場構造・消費パターンのために国際競争の影響は少ないと結論する。経済自由化、グローバル化の中での国内産業淘汰といった単純な図式にはまらない興味深い指摘であるが、それだけにいくつか課題も残されている。中国、バングラデシュなどの海外との国際競争力の比較や、クラスターごとの強みと弱みの抽出を期待したいところである。

第8章は、輸入代替により比較優位を実現した医薬産業を取り上げる。一般に輸入代替政策がインド工業の停滞をもたらしたとされる中で、貴重な事例と言えよう。同産業の発展過程を、独立以前、独立～1970年、1970～1980年代、1990年代、2000年代以降に分けて丁寧に説明した後、発展の要因として6点をあげる。特に重要なのは、1)「1970年特許法」の下で自由な技術の獲得と普及が可能となり、それが最新の医薬品の模倣創造と製造技術革新につながったこと、2)医薬品低価格規制令の下での低価格規制がコスト競争をもたらしたこと、3)価格規制の強化が輸出インセンティブとなり、海外市場への進出を促したこと、とする。また最近の動きとして、医薬品アクセスに注目し、それが今後の同産業の成長に影響を与えているとしている。計画経済期に価格競争が存在し、経済自由化期には海外からのアウトソーシングの展開だけでなく、外資規制の方向も新たに出てくるなど、かなり特殊な動きを示している。それは医薬品という財によるものなのか、それとも他にもそれに類する産業があるのか、知りたいところである。アパレル産業ほどではないが、やはり集積ごとの違いの分析も必要であろう。

第9章は、需要牽引型成長を代表する事例として乳業の発展を考察する。経済発展により一般に食料の需要構造が変わるのは言うまでもないが、農村との関わりでは商業的農業の発達が特に重要である。日本の戦後の経験でも明らかなように、所得の向上により野菜、果樹、畜産などの部門が拡大していった。本章でとりあげる乳業は、生産・加工・流通においてアグリビジネスの役割が大きい部門であり、経済自由化による変化を見るには好適な事例と言えよう。生産面では契約農家方式の導入、加工部門では従来の酪農協同組合に加えて民間企業や外資系企業の新規参入、流通形態の近代化の発展を明らかにしている。酪農政策も貧困削減目的の酪農業から市場志向的な近代的酪農ビジネスへと転換しつつあるとする。そこから、今後、農業と酪農業との分業、あるいは伝統的農業とは関連のもたない近代的酪農業が進展する可能性があることを展望する。大きな方向性としては著者に同意するが、むしろ重要なのは伝統的な酪農と企業酪農の関係、酪農協同組合と乳業アグリビジネスの関係がどのようなものとなり、また政府によって調整されていくかはなかろうか。そこには、政治や農村経済の問題が色濃く投影されるに違いない。

最後の第10章は、インドが抱える代表的ボトルネックである電力セクターに焦点を当てている。電力セクターの概要を把握し、問題点を明らかにし、それをふまえて改革について述べるというシステムティックな構成となっている。このセクターの問題点として、電力供給については電力不足、電化率の低さ、停電頻発に代表されるサービスの「質」、州電力事業の破綻では巨額の営業赤字をもたらしている電気の損失率の高さ、コストを度外視した農業用電力料金が指摘されている。改善のための改革は、経済自由化への転換によりようやく着手されたが、民間資本の利用は一定の成果をあげたものの、配電部門の立て直しは失敗とみている。著者は、インドが多くの貧困人口を抱え、カーストや所得、宗教など数多くのグループによって構成される民主主義国家であるため、複雑な利害調整、コンセンサスの形成に時間を要するとして、そうした状況を顕著に反映する電力部門の改革の困難さを予想している。

以上、各章の内容を簡単に紹介し、若干の疑問と意見を付した。本書は大変読み応えのある本である。どの章も興味深い論考であり、激動のインドに取り組む著者の意気込みが伝わってくる。最後に、本書全体に

関わる重要点についてコメントを記しておきたい。

第一には、本書全体の構成に関わる点である。第1部で激動するインドを捉えるための分析視角が提示されているが、第2部、第3部の各章が必ずしもそれを十分にふまえた形にはなっていないように思われる。分担執筆の場合はやむをえないとも言えるが、第一部の貴重な論点が十分活かされていない点が惜しまれる。

第二には、第1部第2章の議論についてである。著者は、近年のインド社会の変動に関して、都市や海外とのつながりを重視する見解と、農村部の主導的な役割を重視する見解があるとし、どちらが先かという議論は生産的でないと述べている。筆者もこの考えには賛成であるが、社会変動の枠組みにはどちらのファクターも組み入れることが求められよう。この点で、著者の枠組みは農村を軸として構築されているだけにやや一面的な感は否めない。第3節の労働市場、生産構造がこれを補っているが、さらにグローバルな編成力にも迫っていくことが求められよう。この点については、第2部、第3部で得られた成果の中からも取り入れるべきものがあるように思われる。

第三に、都市と農村の中間地域の問題は貴重な指摘であるが、その概念が適切かどうかは検討の余地があるように思われる。ここでの議論の特徴は空間面と社会面を一体的に議論しているところにあるが、それゆえに空間的な面があいまいになってしまっているような気がする。今後、現代インド研究にとって重要な論点となることが予想されるので、さらなる発展を期待したい。

以上、いくつか気づいた点を指摘したが、それらは本書の価値をいささかも減じるものではない。今日のインドを理解するのに最適の書であり、さらに本シリーズの他の巻を併せて読めば、現代インドの理解が進み、新たなインド像を見出すことができるに違いない。

最後にこのような斬新なシリーズをまとめられた編者に大いなる敬意を表して、筆を擱きたい。